

# 明治時代建築の新歩

工學博士 伊 東 忠 太

此お話を申上げるには、建築といふことの意義から申上げなければ徹底いたしませぬが、さういふ時聞もないやうでありますから、直に本論に入ります。お話が徹底しないやうな點がありましたならば、どうかお許しを願ひます。

日本の建築の變遷の大勢を見ると、太古より今日に至るまで、要するに三段の變遷をして居る。其第一回は、太古より佛教渡來までの間でありまして、此時代を原始時代といふたら宜からうと思つて居ります。此時代の建築は洵に幼稚なもので、唯雨露を凌ぐに足れば宜いといふやうなものであります。其材料は絶対に植物性のもので、礦物性のものは一つも無い、木を伐つて來て柱とし、草を蒔つては屋根を葺き、全然植物性のものを以て造つて居つたのであります。其實例は、例へば出雲の大社であるとか、又は伊勢の大神宮であるとかいふものであります。當時の宮室は遺つて居りませぬが、遺つて居れば矢張り同様の形式でありました。この時代を私共は南洋的建築の時代と斯う申します。といふのは今日でも、南洋諸島にては斯ういふ性質の建築が澤山ある。即ち日本の最古の建築は南洋的であ

るといふことを信じて居る。

それから其次の時代は、佛教渡來より明治維新まで随分長い間でありますが、之が第二期で、それは前記の南洋的といふのに對して、之を大陸的といふたが宜からうと思ふ。是は亞細亞大陸の文化の感化でありまして、先づ朝鮮、後には支那、其支那といふのが段々詮索して見ますと、西方亞細亞乃至歐羅巴とも交渉がある。兎に角亞細亞大陸の感化を受けて生じた文化の産物なる建築で、是は佛教建築を主として居つたのであります。此時代にあつては、建築もずつと進んで参りまして鑛物性のもの、即ち石や土を使い、瓦を以て屋根を葺くといふことで、植物性以外に鑛物性の材料を使ふことになつて來た。併しながら今日から見れば、なほ餘程幼稚なものであります。

それから第三期は、即ち明治以後今日に至るまでの間であります。是は前期を大陸的、其前を南洋的といふたに對して、世界的と名づけたいと思ふ。此時代になると、其建築は天然の材料に便らずして人工的の進歩した材料を使ふ、さうして凡ゆる科學的方法に依つて建築を造る、斯ういふ時代になつて参りました。此三期の順序は、洵に理想的の進歩と思ひます。原始的から進歩的となり、さうして今日のやうな文化的——文化といふことの眞義は、能く分らないですけれども、此頃無暗に文化々々といふ言葉を使ひますから、私も文化といふ言葉を使ふが、所謂文化的といふ——時代になつて参りました。洵に理想的な進歩の順序と思つて居ります。

明治時代になつてから今日まで、既に五十餘年を經過して居るが、其間の建築はどういふ有様であつたかと申しますと、之が又非常な進歩である。細かいお話をして居る時間がありませぬから、直ぐ結論に飛んで参りますが、緒論から結論に飛んで参りますから、お話が徹底しませぬか知れませぬが、兎に角歐羅巴に於て數千年掛つて築き上げた文化の産物なる建築、それに日本では僅かに五十年間に於て追着いた。皆さんも能く御承知の通り、是は世界の驚異であります。若も僅か五十年間に、數千年間掛つて築き上げた西洋の文化に追着いたとすれば、夫は慥かに驚異であります。眞に追着いたかどうか、夫は疑問でありますが、兎に角其近所まで参りました。さうして尙ほ日に月に非常な速力を以て進みつゝあるかの如く見える。早いお話が東京市の丸ノ内の有様であります。私共は子供の頃に覺えて居るので、今より三四十年前はあそこは草茫茫として、人跡稀なる荒野であつた。それが僅の間に御覽の通り、所謂歐米風の大廈高樓が相櫛比して實に外見上は、立派な體裁になつた。實に驚くべき變化であります。兎に角是は進歩といはなければならぬかと思はれるのであります。丸ノ内ばかりではない、東京市内何處へ行つても先づ十年前までは見る影もない所が悉く開發され、田は埋められ畑は潰されて、皆市街地となつて、立派な建物が立ち並ぶ様になりました。夫で爰に考ふべきことは、斯の如き現象を以て、果して建築界の進歩と言つて宜いかどうかといふ問題であります。今日お話の趣意はそれでありませぬ。

我が今日の建築界は、此十年前に比して見違へるやうな景況になつて來たが、之が果して本當の進歩であらうかどうか、是は冷靜に考へなければならぬと思ふ。一體進歩といふのは何であるか、進歩といふのは或理想的の目的に向つて進んで行く道程でありませう。でありますから、建築の進歩といふことをいふ以上は、建築の眞の目的は何處にあるかといふことが分らなければならぬ。これが分らなければ進歩だか退歩だか分らない。又他の方面から見ますと、進歩といふことは一つの運動であつて、運動といふものは何時でも相對性である、是はアインシュタイン先生を俟たずして自明なことであります。同じ方向に向つて進んで居つても、例へば甲乙並び進んでも、甲の方が急速力で進んで行き、乙の方は緩速力で進むならば、甲から見れば乙は退歩して居るやうに見えるのです。これは吾々は京濱電車と汽車の競走で、毎度實驗をして居る所です。即ち進歩といふ現象は、相對性であつて、若も目を後ろに着けて居る人から見ると、前進するものが後進するやうに見え、目を横に着けて居る人から見れば、前進するものが横の方へ、即ち邪路に進むように見えるのであります。さう考へて見ると、正しい進歩といふことは容易に分らない。どれが本當の進歩であるかは、局外の絶對の地位から見なければ分らない。私共は建築の渦中にある人間であつて、自分で自分の目が何處に着いて居るか分らないのです。却て皆さん方のやうに建築に關係の無い局外の方から冷靜に御覽になる方が、果して建築が進歩して居るか退歩して居るか、横の方に行つて居るかお分りになりますので、願はくはお教へを戴きたい。今日のお話

も、畢竟皆さんの御高評を得たいといふのが主意であります。で、私は自分の立場から見て、建築が進歩して居るか退歩して居るかといふことをお話するのであつて、私の觀察が果して正しいか否かは、斷言し得ないのであります。

扱それならば、汝は建築の目的は何であると思ふか、抑々建築とは何であると考へて居るかといふお尋がありませうが、それをお話するには少しく餘談に亘りまするが、他の方面から遠廻しに申上げた方が却て宜からうと思ふ。御承知の通り衣食住といふ言葉がある、着物に食物に家であります。それは人間の生活の三大要素であつて、互ひに密接の關係を有つて居るのみならず、互に共通の性質を有つて居る。夫でどなたも必ず衣食住といふことに就いては、よくお考へになつて居るのですが、就中食といふものが一番適切に考へられて居ると思ふ。何故なれば食といふものは自分の肉體の中に直接に取入れるのであるから、是程適切のものはない。衣といふものは自分の肉體に纏うて居る、住といふのは自分の身體を入れる入れ物で、段々肉體との關係が薄くなるかの如く見える。であるから直接關係の深い食物はどなたもよく研究をしてお出になるが、住の方は比較的研究が浅いのでありましようが、兩者は全く共通の性質があつて、食を以て住を律することも、或程度まで可能であります。

此食といふものに就いて考へて見ると、矢張り建築と同じやうに、初めは原始時代で、其時には野生の植物と野生の動物の肉をその儘で喰ひ、唯饑餓を充たせば足るといふ時代であつたのであります。と

ころが進歩した時代には、それでは満足が出来ない、種々なる方法で調理を試み、種々なる味を付けることを工夫した。即ち色々の材料を使つて甘味を附けたり、鹹味を附けたり、煮たり焼いたり、天麩羅にしたりして喰ふのであります。ところが此頃になるとそれでも満足が出来ない。即ち第三期に入りまして以來、食物の榮養といふことをやかましく言つて來たのであります。即ち理化學の進歩するに隨つて、榮養といふことを研究し出した。やれ何といふ食物には脂肪がいくら、蛋白質がいくら、含水炭素がいくら有つて、どれ丈け食べばどれ丈けの熱量が出るなど、計算する。最近にはビタミンが大に宣傳され、ビタミンにもa、b、c、などの區別が出来、更にd、e、fと何處まで行くか分らぬ。斯う云ふ風に食物を研究し出して、食物は榮養價の高いものを喰はなければならぬ、唯うまいとかまづいとかいふのではいかぬといふことになつた。確かにこれは食の進歩だらうと思ひます。建築が丁度それと同じであります。全く同じ步調で進んで居ります。着物もさうでありますが、着物の方はお話しませぬ。建築は初期に於ては、雨露を凌げば足るとして、小屋を掛けて其中に潜つて居つた。第二期になつては、それでは満足が出来ない、氣持の好い家にしたと云ふので、形を整へ、裝飾を加へ、趣味に富んだ家を工夫した。即ち藝術的方面に進歩して來ました。ところが第三期になつて、それでは未だ満足が出来ないで、更に進んで、今度は食物でいふと、今の榮養の研究に相當するのですが、建築の方で言ふと、今日の流行語の所謂文化といふやつで、所謂文化といふやつは、私には能く分りませぬが、畢竟文

明開化の略稱で、進歩した科學を應用した處の最も合理的にして同時に最善良なる家、即ち文化建築が理想とせられる様になつたのであります。そこで既往に於ける建築の觀念と現今に於ける建築の見方とは、全く變つて來たのであります。是から建築の較々専門的のお話になる。

明治以前、即ち第二期の終り迄は、國民は建築なるものに就いて、深い考察が無かつた様であります。否、明治の初年に於ても建築は餘り深く注意されなかつたのであります。處が近頃思想界の急激なる變動につれて、建築に對する國民の見解は俄かに發達して來ました。昔は建築は、建築の爲の建築であつたかの觀がありました、今では建築は人の爲め社會の爲の建築であつて、建築の爲の建築ではない、と解せられつゝある。もう少し之を具體的に説明しますると、例へば昔の建築は、玄關は斯うする、客間は斯うする、床は斯くするもの、棚は斯くするものと云ふ風で、それは建築そのものの爲の建築でありました。ところが今では、それでは承知が出来ない、そんな形式のことよりは、寧ろ住ふ人の爲め光線はどれだけの分量が要るとか、温度は是だけのものを保たなければならぬとか、衛生設備は斯うしなければならぬとか材料構造は斯くするが合理だとか、總て住ふ人の爲から割り出すので、型を重んじ形を整へるなど云ふことには、餘り重きを置かなくなつた。これが第一箇條であります。

それからして建築といふものの範圍が、非常に廣くなつた。昔は大工といふ者は、家を造つたりお宮を造つたりする外に藝が無かつた。今はさうでない。決して家や宮を造る計りが建築家の仕事でもな

く、又建築そのものの本来の目的でもない。先づ第一に住宅は申すまでもないことでありますが、之を大にしては、最近に頻りに宣傳されて居りまする都市の計畫即ちダウンタウンニングといふことであります。一つの都市を計畫するのは建築家の職業で、建築學の一科になつてしまひました。尤も日本では昨今漸くこの曙光が現はれましたが、歐米では疾く昔からやつて居りました。實に羅馬あたりから數千年來やつて居りましたが、日本は後れ馳せながら今漸く茲に到つたのであります。或は公園の設計、それから都市に附屬した橋を架けることでも、或は裝飾的の建造物を造ることでも、皆建築の一科で、建築は必ずしも家を造る計りが能でなく、非常な廣汎な範圍に解釋されて來たことが建築の一つの進歩であります。これが第二の個條であります。

それから建築の種類が、又非常に殖えた、驚くべき程殖えて來ました。是は世の中が進歩すればする程建築の種類が殖えるのであります。明治初年までは日本の建築の種類は二つか三つしかない。住宅、官衙、或は社寺位のものでありまして、公共建築といふものは、僅かに劇場位のもので、殆んど無いと云つてもよい位でありました。所が明治以後公共建築は、非常に殖えて參りました。是は即ち世の進歩、社會の進歩であります。其種類は到底今茲で數へることが出來ないのであります。皆さんも試に丸ノ内あたりを振出しに東京市中を一遍すつと通つて御覽になると、公共建築の種類が多いのに驚かれるでしょう。例へば第一に會館、——この明治會館もその一例ですが——夫から俱樂部、ホテル、銀行、工場、



葬儀場、事務所、旅館、ステーション、各種の官衙、劇場、夜席、湯屋、博物館、學校、病院、監獄、圖書館、議事堂、料理屋、百貨店、といふやうな風で、殆ど數へることの出来ない程建築の種類が殖えて來た。是は世の中の進歩の爲である。それだけのものを建てなければ足掻きが取れないので、さういふ風の建物が殖えて參りました。これが第三の個條であります。

先に第一の個條として申述べましたが、更に今少し具體的に建築物そのものに就いて考へて見ましよう。例へば家をつ造る場合に於て、その間取に就て考へて見ても、昔の封建時代の家は體裁本位、儀式本位でありました。夫はお話を申すと長くなりますが、昔の武家の生活状態から必要上出て來たのであります。先づ玄關がある、玄關を入ると右か左の方に連續して客間があつて、必ず床、違棚を取るといふやうな儀式的體裁的に造られたものであります。それが明治時代になるまで其儘繼承されて、誰も氣が付かずに不自由とも變だとも思はないで住んで居つた。家といふものは斯ういふもんだげなといふことで、何の考もなく住んで居つた。近頃大分分つて來まして、家は家本位でなく人間本位である、今までのやうではいかぬといふことに氣が付きしました。それで今日の間取は、御承知の通り大變變つて參りました。御客本位が家族本位に變りました。家族本位といふことが段々と細かに研究されて參りまして、最近には住宅は、子供本位でなければならぬと云ふ人がある。何故かと云ふと、それは第二の國民を養成して、自分の後繼を造るのが國民の最大義務であるから、家といふものは子供を拵へ、子供を

養育する處でなければならぬといふことをいうて居る人がありますが、成程一理ある話であります。そんな風に考が變つて参りましたから建物の間取などいふものが、大分變つて來るのであります。それから又段々世の中が世智辛くなつて來ますから、今までのやうな暢氣なことでは駄目だ、そら椽側も廢めてしまへ、中廊下も廢してしまへ、台所は廣過ぎるから半分にしる、兩戸は五月蠅いから全廢しろ、寧ろ西洋風が便利であると云ふ工合で、追ひ／＼切り詰めた間取が行はれ、同時に歐米趣味の家が日に月に發達するのであります。これを第四の個條とします。

それから今度は、材料構造はどうなつたかといふと、是も昔は極めて暢氣なものでありまして、家といふものは木で造るものと考へ、木は焼けるものと考へ、家が焼けるのは當り前であると考へて居つた。ところが段々進んで参りますと、さうでない。焼けてはならぬ、腐つてもならぬ、地震に潰れるやうでもならぬ、一年中びく／＼しながら住つて居るやうなことでは逆も駄目だ、火事でも地震でも持つて來いといふやうな家に安心して住まはなければ、生きて居る甲斐がない、斯ういふのであります。そこで段々と進歩して参りまして、明治二十八年でありましたが鐵骨構造が始めて數寄屋橋に出來ました、彼の秀英舎といふのが、東京に於ける初めてのものであります。夫から明治三十二年に始めて鐵筋コンクリートといふものが出來ましたが、御承知の通り今日大流行である。あれならば火事が來ても平氣です、地震にも平氣であります、焼けることも壞れることもない。一體天然の野生の材料を其儘持つ

て來て家を造るといふことが抑々をかしい。丁度食物でいひますと、野に生えて居る草を根扱きにして喰ふと同じであります。野生の材料即ち木材或は石材といふやうなものを其儘持つて來て家に使ふといふことが、既に甚だ幼稚な次第、日本人は幸か不幸か、木材の家に數千年來往慣れて居りまして、木材の趣味を深く感じて居りますから、さうは思はないのでありますが、理窟から申しますと、是は甚だ幼稚なものであります。もう焼けることは分り切つて居る、腐ることも分り切つて居る、それに入つて居るのが甚だをかしいのであります。慣れといふものは恐いもので、一向をかくも思はないし、變にも思はないのであります。之に反して鐵筋コンクリートといふものは、進歩した材料であります。火事にも耐へ地震にも耐へるといふ進歩した材料であります。今後又更に進歩した材料が發明されるかも知れませんが、今日に於ては最適當な材料であります。併し世間ではまだ充分に、この新材料の効力を知らないと見えて、應用の範圍が極めて狭いのであります。私の心覺えに覺えて居るものを申しますと、大正七年末に鐵筋コンクリートの建物は、百五十四棟でありましたが、大正九年末に於ては、それが二割四分殖えて居ります。今日はすつと殖えて居りましょうが、それにしても随分少い。東京市のやうな火の危険の多い所に於て、さういふ少いことではならぬのでありまして、今後益々發達しなければならぬことは明かであります。兎に角材料構造といふ方で最近異常の發達をして來て居る。之を第五の個條と致します。

それからして其次には設備といふことであります。之が又既往を顧ると殆ど隔世の感がある。設備の完備しましたことは、矢張り是は所謂科學の賜でありまして、一例を申すと、所謂瓦斯。電氣などの設備であります。私共明治初年にまだ赤坊の時分に、覺えて居りますが、其頃は燈火は皆、菜種の油に由る行燈を使つて居り、夫から幾年か経つてから石油のランプを使ふやうになり、近頃になつて瓦斯を使ひ、今日では専ら電氣を使ふやうになり、其電氣にも種々なる種類や装置が發明されるといふ譯であります。さういふ文明の利器を家の設備に應用するといふことに、今日はなつて來て居ります。それから又他の例を申上げると、衛生設備であります。例へば暖房、即ち室を暖めるのに、昔は炬燵を掛けたり行火に啗り付いたりして居りましたが、——火鉢は今でも使つて居りますが、——近頃は瓦斯ストーブ、電氣ストーブ、或は大きな公共建築物には蒸氣、熱氣其他種々なる装置で暖房をする。或は給水の方法、水道を設けて到る處に自由に給水が出来る。汚水の處分の如きも今日では、便所は全く無臭無害のものに淨化されるといふ状態でありまして、總ての設備に於て非常な進歩をして居るのであります。之を第六の個條と致します。

さういふお話を申して居ると、何時まで經つても盡きませぬから止めますが、要するに明治時代になりました、建築に關する思想、建築の範圍、建築の種類、建築の間取り及形式、材料及構造、設備等の各項に亘つて著しく變化を來したのであります。さうして最近に於て、特に文化主義、能率主義といふ

ことが、非常に宣傳されて居るのであります。私はこの主義に就いては、一般の説と多少違つた考を有つて居りますから、此際それに就いて、少しくお話をして置きたい。

今日のやうに、科學の力に依りまして、建築の構造、設備等が段々改良されて來ると、世の中は段々と物質主義に傾いて來ます。さうして世の中が段々と世智辛くなつて來るので、出來るだけ科學の力で出來るだけ能率を擧げたいと云ふ要望が起ります、即ち能率主義といふものが宣傳されるのであります。能率主義とはどういふことかといふと、本來は百の物を使つて百パーセントの効果を擧げるのが能率の極であります、近頃はもつと欲張つて參りまして、百の物を使つて二百の物を生産しよう、百の物から三百の物を得ようといふ欲張つた考になつて來た。無から何等かの有が出て來れば、尙ほ宜いといふ、それは無理な話であります。兎に角今日の所謂能率主義は隨分慾張つた考である。例へば建築に就いていふと、先刻も申しましたが、切詰めた經濟でやつて行くには、切詰めた建築でなければならぬ。椽側は贅澤であるから廢める、廊下も贅澤であるから廢める、食堂と寢室と書齋とを別々に持つて居るのは贅澤だ、一つの室で飯も喰ひ勉強もし、夜になつたら床を取つて寢れば宜い、一の室が二重にも三重にも使はれる工夫をするといふやうに、何處までも切詰めた生活をするといふことが、今日唱導されて居ります。家屋の改善の根本は生活の改善であるから、第一に今日の不經濟で不合理である處の所謂二重生活を改めて、之を單純生活とせねばならぬ。夫には歐米風の生活に倣ふがよいと云ふ主張

も、随分有力であります。併しながらこれは大問題であつて、餘程慎重に考へなければなりません。一體日本人の二重生活は甚だそれは不經濟不能率であることは否認されないのでありますが、凡そ世の中は進歩發達すればする程複雑になります。例へば前に申した通り、明治初年には建築は數種類であつたのが、今は數百種類になつた。舊日本の遺習がまだ可なり強い勢力を有つて居るのに、新日本の新慣習が非常な勢で加はつて来る。生活が二重三重になるのは當然であります。世智辛い世の中で二重生活に堪へないから、之を單純化するといふのであれば、夫は己むを得ざる窮策であるといふことは、此際十分に考へて置く必要があるのであります。私の考では、二重生活を忌避して單純生活に立ち戻らうといふのは、是は所謂文化時代から原始時代に逆行しようとするものであると思ふ。尤も或哲學者は、今日の社會は物質文明の餘毒の爲に悉く腐敗して居るから、原始時代の單純生活に立還るのが理想であるといふのであります。それは哲學者の議論であつて實際生活には適しないのであります。要するに今日の世の中といふものは、益々複雑になり、隨て生活は益々複雑になる。其複雑なる生活に相當した合理的、經濟的、能率的なる方法を講ずることが理想だらうと思ひます。一寸一例を申上げますと、私共毎日晝は斯ういふ着物——所謂洋服——を着て働いて居る、何故之を着るかといふと、是は働くの用に便利であるからで、何も之が美しいとも何とも思つて居はしない、又歐羅巴人の眞似をする爲でもない。唯働くの都合が宜いから之を着て居る。家へ歸りますと之を脱いて、和服に變へて胡座をかくだす。

寛ぐにはそれが都合が宜いからさうするので、之をしも二重生活であるとお叱りを受けるならば、甚だ迷惑であります。日本に於きましては、昔から此様な二重生活はやつて居る。例へば普通の職工等も印絆纏を着て外で働き、家へ歸ると浴衣掛けか何かで寛ぐ。この洋服も畢竟一種の印絆纏であります。建築に於ても其通りで、二重建築が決して悪くはない、働く所は西洋風の、椅子卓子を備へた建築で、寛ぐ所は畳を敷いた日本風の建築であつて、夫で少しも悪くはない。飯もさうであります。且に米飯を食ひ、夕にパンを嚙るのが不都合であるといふことは決してない、二重生活差支なしといふのが、私の議論であります。二重生活必しも常に不能率にあらずと云ふのが、私の主張であります。能率不能率は方法の問題であつて、主義の問題でないと思ひます。少し話が餘談に亘りましたから、元の本論に還ります。

明治以後の建築は、各種の方面に於て進歩して居るといふことを申し上げましたが、然らば明治以後の建築は、理想的に發達した完全なる建築であるかと申し上げますと、それはなか／＼さうではないのであります。丸ノ内の盛況のことなども、最前からお話申しましたが、それを以て私は、理想的に進歩して居るとは思はないのであります。何故かといひますると、矢張り是は食物を以て譬へて見ましよう。日本人が支那料理だの佛蘭西料理だの亞米利加料理などといふものを矢鱈に喰込むのが、それが食物の進歩といへましようか、私は食物の進歩ではないと思ひます。建築に於きましても獨逸風の建築、英吉利風

の建築、亞米利加風の建築を併べて見た所が、それが建築の進歩とはいへぬと思ひます。それでは駄目でありませう。それならばどういふのが、建築の進歩かといふお尋がありませう。それは矢張り食物を以て譬へると、本當の理想的の食物は簡單で、うまくて、さうして榮養に富んで、國民一般が容易に得ることが出来なければならぬ。建築も矢張りそれなのであります。さういふ建築が出来れば、それが理想なのであります。即ち第一に經濟的に出来て、さうしてうまくて——建築のうまいといふのは、建築の趣味の問題であります——さうして榮養のある——榮養のあるといふのは建築に取つては、是は實用的問題であります——所謂善美なる建築であれば宜しいのでありますが、果して今日斯の如き建築が大成して居りましょうか。經濟といふ事は、是は一寸問題がむづかしいのです、別問題として一寸取除けて置きます。それから實用の方はどうかといふと、是は前に申しました通り、科學の力に依つて殆ど遺憾なく出来て居る。昔と違ひまして、今では寢そべつて居つて釦を一つ押せば、何でも用が足せるといふ様なことで、便利な世の中で、實質的方面は申分がないといつて宜い位であります。唯うまいかまづいかといふのが疑問であります、私は現代の建築はうまいとは思へない。若しも此食物がうまくなければ、それは殆ど役に立たない。例へば衛生博士が此食物は、どれだけの榮養分を含んで居る、之を喰へば身體が丈夫になるといつて、無理に喰はせようとしたところが、其がまづかつたら誰も喰ふ者はない。それは或場合に藥になるか知れませぬが、常食にはならぬ、それでは駄目だ。幾ら衛生博士が宜



傳した所でまづい物は、誰も喰ふ者はないのです。それよりも非常にうまい物ならば、衛生博士がそれは毒だからお止しなさいといつても喰ふです。さうして非常にうまいと思つて喰つたものは、不思議なかな何でも皆榮養になる。何故かといふと、うまいと思つて喰ふと、大抵のものは消化してしまふ。まづいと思つて喰つた日には、どんなものでも消化しないから何にもならぬ。消化しなければ唯糞便の材料になるだけであります。建築もさうであつてうまくなくては役に立たぬ。幾ら諸設備がどうの、光線の分量がどうであるの、温度の加減がどうの、下水の處理がどうのといつて科學的施設が完成された所が、まづい建築では誰も住ひ手が無い。住つた所で氣持が悪くて迎も堪へられない。でありますから要するに家といふものは食物と同じことで、經濟的に出来て、さうして物質的の設備が萬端調つて居ると同時に、うまくなければならぬ。之が大事なことである。然るに此方面は餘り人が重きを置かないやうである。食物には非常にうまいまづいをやかましくいひますが、建築の方には、さほど建築のうまいまづいをいはない。唯物質的方面のみ走つて居るのは、大なる缺點であると思ひます。然らば其建築のうまいといふのは、どういふのであるかと、斯ういはれると、是は洵に答辯に苦むのであります。甲の人はうまいと思つても、乙の人はまづいといふ、標準がない。麥喰ふ虫も好き／＼で、辛い物を喰つてうまいと思ひ、又蛆虫のやうに糞便を喰つてうまいと思つて居る虫もありますし、分らない。併しながら分らないといつて放棄して置く譯に

行かぬ。それは或程度までは修養に依つて、それが分つて来る。兎に角明治時代になつて建築の味ひといふことは、昔と比べて進歩して居るや否や、甚だ疑問に思ふ。西洋にして見ますと、希臘羅馬時代に出来ました建築の或ものは、殆ど古今を通じて空前であり、又絶後であるといふ位な美しいものであります。夫が今日の美建築と稱せらるゝものと比べて何方がうまいかといふと、分らない。恐らく昔の方向がうまかつたか知れませぬ。日本でもさうであります。今日丸ノ内に四角な箱に穴が明いて居るやうな建築と、數百年、數千年前の堂塔宮殿の建築と、何方がうまいかといふと、人に依つて一々趣味が違ふのでありますから、何方であるか容易に分らない。して見れば、明治時代の建築といふものは、此點に於ては案外進歩して居ないかも知れない、洵に是はをかしたことであります。最前明治時代の建築が着々進歩して居るといふことをお話いたしました、斯うなつて参りますと進歩して居るといへなくなつて来る。どういふことになるでしょうか、是から此現象を具體的に説明する爲に、茲に二つの代表的建物を舉げて見ましょう。それは皆さんが始終御覽になつて居る東京驛前に新規に出来ました、まだ完成はして居ませぬが、丸ノ内ビルディングといふ建物であります、是が一つ、それから是もまだ悉皆落成ではないさうですが、先づ殆ど落成した帝國ホテルの建物、此二つを對照してお話して見ましょう。

同じく大正の今日に出来て、同じく最新式建築として誇つて居る所の東京市を飾るあの二つの大建築が、正反對の主義に由つて正反對の形式で出来て居る。丸ノ内ビルディングといふのは、あれは實用本位

で出来て居る。私は茲で建物の善惡の批評をやるのではない。唯有の儘を説明するのであるが、あれは實質主義の建築であります。それから帝國ホテルといふ方は、是は新聞なども實際御承知であります。もうが、あれは亞米利加のライトといふ先生が、造つたもので、頗る變つた建築で、あれは趣味本位であります。等しく大正の今日に、一方は趣味本位、一方は實用本位で造つて居る建築で、丁度榮養本位と味本位の食物に相當するのです。一方の建築は右の方に進み、一方のは左の方に進んで居る、どつちの道が正しいのか、一方が進歩なら他方は退歩でなければならぬ、と云ふ疑問が起り得る譯であります。處で丸ノ内ビルディング派の主張は、あの建築は實質本位であるが、實質の具備された建築は、同時に又味も美である。既往の建築の美とは、美の性質が違ふが、既往の美は眞の美でなくして、丸の内ビルディングに現はれたやうな單純實質の表現が、眞の美であると云ふのであります。又彼の帝國ホテルを造つたライトの主張はどうか、彼は、建築は最高の藝術であつて、天才的の獨創を發揮した一種の心靈的表現が、建築の生命であると信じ、思ふ存分、縱横無盡の意匠を振り廻したので、實用的條件には多く顧着しなかつたやうである。その結果は儘に、一種の妙味が現はされた。但しその味は非常に濃厚で、その中に一寸澁味がある。之を食物に譬へますと丸ノ内ビルディングは素飯にお湯を掛けて喰つて居るやうなものであり、帝國ホテルは五目鮓にこてくと、いろいろな藥味を打あこんだやうなものであります。素飯が優るか、五目鮓が劣るか、どつちがうまいか、どつちがまづいか、夫は人の好惡にま

かせるとして、凡そ世の食物は、決して單調であつてはならぬ。素飯も食ふべし、牛肉も鰻も結構である。素飯には素飯の味があり、牛肉には牛肉の味がある。要するに食物の種類及調理法は、多種多様であつても、等しく夫れがうまければよいのである。

現代の建築界に統一がないとは、よく人の言ふ話であります、併し私は統一のない方が結構だと思ひます。なるべく多種多様に岐れて、各自特殊の手法を發揮することを望ましく思ひます。只同時に、それ等が等しく美であることを、絶對の條件としたいのであります。

段々申上げました通り、明治時代以後の建築は、既往の建築に比べて確かに非常な進歩をして居る。併しながら其進歩は主として物質的方面、實用的方面——或は科學的の方面といつた方が宜いかも知れませぬ——その方面の進歩であつて、趣味の方面、語を換へて言へば精神的方面、その精神的方面の方面はまだ進歩して居るとはいへない。それは昔の趣味の多い建築に比べて劣つて居るともいへないが、優つて居るともいへない。然らば今後日本の建築を進歩させるには、どうすれば宜いかといふと、方法はむづかしいが、趣意は簡單である。それは食物と同じやうに、實質的の方面と精神的の方面、或は有形的方面と無形的方面、或は肉體的方面と精神的方面といつても宜い、其二つを調和させて大成させるといふことが、此建築を大成せしむる所以である。それは空論ではない、明白な實際論だと思ひますが、扱それならば、如何にして夫を實現するかといふ問題が起るのですが、それは分らぬといつて引下るこ

とは出来ないであります。爰に結論して一言聲明して置き度いのであります。一體榮養に富む食物は澤山ある、それをうまく喰はせようとする、うまく喰はせる爲には調理法と云ふ藝術が必要であります。この技術に依つて味が出て來るのであります。建築も其通りで、少しもそれとは違はない。即ち簡単に申しますと、建築の科學の方は、是で先づ一通り出來て居るものとして、それに味をどうして附けるかといふと、それには藝術的建築學、又は建築藝術、その又根本は建築美學でありますが、これが必要であります。その實際的手段としては、第一に古今東西に於ける美建築を研究して、夫から暗示を得、様式手法の工夫を致すのであります。日本の既往に於て三期の進歩して來たとは、最初に申し述べましたが、日本の建築は第二期になつて亞細亞大陸の文物を攝取した爲に、異常なる發達をなして多くの美建築を生じました。今や第三期に至つて歐米の文物を攝取して、更に異なつた方面に於て大發展を遂げ、追ひ／＼美建築を生せしめねばならぬ。今後は益々博く古今東西の研究を進め、優良なる實例から新しい材料を得て、建築の調理を試みなければならぬ。例へば茲に鐵かある。其鐵を熱灼しまして幾ら鍛へましても、只だ夫れ丈けでは鐵は鐵で、決して鋼にはならない。其處へ炭素といふものが加はるので、鐵の成分が一變して鋼といふ非常に硬いものが出來る。又其處へ最近冶金學の研究に依つて色々なものを入れますと、鋼の數倍數十倍も硬いものが出來る。それは皆外來の原素を入れた結果であります。日本の建築も外來の原素を入れないといつて、鎖國主義を採つて居つたのでは、幾ら鍛鍊しても改

善され美化されない、世界各国古今東西の文物を用捨なく取入れて、同化しなければいけないのでありますが、併し取捨には選擇が大事である。盲目的に取ることはいけない。其取つて宜い部分だけを取るといふことが、之がむづかしい技術であります。それからその攝取したものを融合するのが一つの技術、之が又むづかしい。夫は技術の洗練、識見の向上、精神の修養によらなければならぬのであります。要するに、簡単に申しますると、今後日本の建築をして進歩發達せしむるといふ方法は他にない、それは今の通り古今東西の良い分子を攝取して、さうして之を精神の修養、識見の向上、技術の洗練を以て處理して行く、此外にないのであります。此點に於て、今の人が動もすれば古いものを卻け、歴史を無視し、只管に新しいものばかりに向つて狂奔することは、是は宜くない。科學といふ點から見ると、古いものは大した參考になりませぬが、藝術、趣味といふ點から見ると、古いものに參考になるものが非常に多いのでありますから、吾々は宜しく古今東西の歴史を研究しなければならぬ。しかも歴史に因はるゝことなくして、精神、識見、技術の力を以て之を活用しなければならぬ。私共建築家として建築を研究いたします方針は、即ち只今申上げました趣意に外ならないのであります。お話しが多岐に亘りまして要領を得ない點が多々あり、定めて御聞き悪いことであつたと存じます、長時間御清聽を汚しまして洵に恐縮の次第で御座います。